

書評

『日本の星名事典』

甲田 昌樹（青森県）

◆書籍情報◆

『日本の星名事典』

北尾浩一 著／原書房／定価（本体 3800 円＋税）／2018 年 5 月

* * * * *

日本の星座解説書を開くと、まず星座のギリシャ神話が紹介され、星座を形作る恒星の外国名、そして主な天体が紹介されます。星座解説といえばギリシャ神話。そういう構図が、星座解説書のみならず、せつかくの天文普及の最良の施設であるプラネタリウムでもギリシャ神話ばかりが紹介されるのは残念なことです。聞いた話ですが、海外のプラネタリウム担当者が日本に視察に来た際、「どうしてどのプラネ館でもギリシャ神話ばかり紹介しているのか？」「星について学びたい人はどこへ行けば良いのか？」という質問が相次いだそうです。その通りだと思います。

少し厚い星座解説書になると、星の和名や逸話をいくつか紹介してくれています。星の和名は興味深く、またおもしろいです。

さそり座アンタレスは赤いので「あかぼし」。シリウスは青白いので「あおぼし」。ふたご座の 2 星は「きんぼし、ぎんぼし」。おとめ座スピカは、その澄んだ白色にふさわしく「しんじゅぼし」。

こうした星の和名は、昭和の初めの頃に野尻抱影氏など数名が全国の有志の協力を得て採集したものだそうです。それらを野尻氏は著書に載せたり、ラジオ番組やプラネタリウム解説で紹介していました。野尻氏の下に集まった星の和名は『日本星名辞典』（東京堂出版、1973）にまとめられています。



図 1 『日本の星名事典』の表紙

いくつか星の和名を紹介しましょう。

七夕の 2 星で、こと座ベガには「たなばたぼし」や、先に昇るので「さきたなばた」の名が。これに対してわし座アルタイルは「あとたなばた」。さらにはくちょう座デネブは「たなばたのあとぼし」。

さそり座アンタレスと左右の星を合わせた 3 星は和名がたくさん。「へ」の字に並び、中央が赤い星であることから、商品を載せたかごを左右にてんびん棒で担いだ姿と見て「商いぼし」。秋の収穫物を載せたかごを担いでいると見て、その荷が重くて顔が赤くなっていると見て「豊年ぼし」。また、年老いた両親をてんびん棒で担いだ「親担いぼし」。

おうし座のプレアデス星団は平安時代から「すばる」と呼ばれていることは有名ですが、「むつらぼし（六連星）」「はごいたぼし」などの名も。そしてゴチャゴチャ集まっているので「ゴチャゴチャぼし」。この名は私のお気に入り、秋の星空案内では必ず紹介します。子ども達にも大ウケ！

しかしこんにち、野尻氏の『日本星名辞典』を入手することは難しく、また各地の図書館に置いてあるわけでもありません。かといって再版するほど需要があるわけでもなく。また星座解説書には有名どころの和名しか載らず、それ以外の多くの和名の知られる機会が減ってきました。

そんな中、『星の星名事典』が上梓されたことは、本当にうれしく、ありがたいことです。

北尾氏は、野尻抱影氏の弟子を自負し、全国各地に実際に赴いては、古老の方々から生活の中の星の名やいわれを採集し、それらをホームページ『星の伝承研究室』に掲載したり、東亜天文学会会報『天界』で報告したりしていました。北尾氏がどこかに書いたものを読んだのだと思いますが、星の和名の採集は本当に難しいそうです。

最も困難にさせているのは、近年の情報伝搬による画一化により、言い伝えられた和名が置き換わること。また古老が星の和名を知っていても、それが伝え語られたものなのか、何かの本やメディアから聞き知ったものなのかを判断しなければなりません。

また古来人々の生活と星との関係は、時期や夜中の時刻を知ること、そして観望天気が主でした。それが暦や時計、天気予報などによって、星に頼らずともより簡単に正確に知ることができるようになりました。

このため、内陸の農家で古い星の和名が伝えられる例はほとんど無くなり、北尾氏の和名採集場所は港町になってしまいます。

しかも、古老を訪ねていきなり「昔から言われる星の名前を知りませんか？」と問う訳にもいきません。そのため現地では、漁仕事の長い、そして星のことを知っていそうな老人の所在を聞いてはその方を訪ね、若い頃の漁の話をついとう聞き、その中に星の話が出てこないかを探るそうです。長々と話しを聞くうちに、星の名前が出てくる場合もある

でしょうが、全くの空振りに終わることの方が多いそうです。

また北尾氏は、古老から聞いた和名が語り伝えられたものか、他の何か媒体から見聞きして覚えたものか確認し、また自分の問いかけが何かの和名に誘導しないよう、注意深く採集を行いました。この本には、実際にどのような言葉で採集したのかが詳しく書かれていて興味深いです。

また北尾氏の業績のすばらしいところは、師である野尻抱影氏の『日本星名辞典』にある星名を、伝えた本人にできる限り再確認し、誤りを訂正されたことにあります。発刊後に長きに渡って使われる辞典や事典の内容をより正確に正すことは、大切なことですが、大変なことでもあります。

ところで北尾氏の本来のテーマは、ホームページにあるように「人々の暮らしの中での星の名の伝承」にありました[1]。そのため北尾氏は、野尻氏の辞典と違って、生活現場で語られた伝承を重視して話者の言葉でたくさん書き、書名を『日本の星名伝承事典』にしたかったといます。しかし出版社の意向で書名は短くなりました[2]。

それでも書名に関わらず著書には、野尻氏の『日本星名辞典』発刊以降に採集された和名も含み、写真や適切な図解があり、とても読みやすく、また分かりやすいです。

この本が一人でも多くの方の目にとまり、人々の生活の中の星を感じて頂けることを願います。

文 献

[1] 「星・人・暮らしの博物館へようこそ」

http://www.geocities.jp/north_tail_kk/

[2] facebook、北尾氏のページより

甲田 昌樹